

峯もふるともわかぬまで  
紅葉も枯れてをちこちの  
鳥もなかに何時のまや

雪の夕

雪のひかりの夕ばへに  
家路をいそぐをとめ子を  
いかで今宵のをそきやと  
つめたき雪に父をまつ

花のうたげ

たのしき春ははやしぬと  
たどりく〜てさくら山  
はるのうたげの花むしろ  
こゝろの友と遊ばばや

ふりつもりたる里の山  
梢にひとつつばみなく  
けさめづらしき六の花

つるの毛衣はらひつゝ  
門へにまてる母もわり  
ながむる窓に降積る  
こゝろも優し幼な兄弟

かすめる空に鳥の聲  
笑へる花の下かげに  
こゝに彼處に面白く  
舞つうたひつ暮るまで

冬花

中鳥歌子

うそこみの八手の花も花敷に

寒樹

見らるゝ冬になりけるか那  
紅葉のちるをしみし我宿の

かれ木のかげに不盡は見ゆけり

鶯告春

鶯にひとつかされて敷ふれば

今日こそ春の立日なりけり

竹相園歌會

山

佐々木信綱

かや山のかやきり開き子の爲に

孫の爲めにと杉苗うゝる

佐々木雪子

やまかげにうつろひすみて既に六年

みやこの手振かはり果てけん

増山深雪子

白たへにふりつもりたる朝ぼらけなちのやまく雪に見わたす

松倉止子

さしのほる朝日のかげにがみ山ひかりかやくゆきの色かな

諏訪晴子

のぼらねと富士の高れにくらぶればあしがら山はふもよなるらむ

西 升子

人ごみにいひはやさされてよしの山山のこゝるものどげいゝらむ

板倉藤子

動きなき御代ほぎがほに見ゆる哉としたつけさのちの山まゆ

小橋八重子

初夢のけしきないざやえがきみむ名も新らしきやまにならびて

大塚楠緒子

かはりかばる人の幾世をよそにしてふとの高れは笑つゝあるらし

三宅貞子

ましろなる不二のあなたに日は落て墨繪に似たるふゆ木だちな

大竹以勢子

盡なかいぬ身さへ心にえがくかなみもけたかきかつらぎの山

松浦島子

山また山うちつゞきたるそのかげえわがふるさこの上つけのくに

金井繁子

つゞらなり道絶なむさためらへば山のすがたも日にば入らずく

堀 孝子

はつゆきのふりかゝりたる築山を一日ながめてひざりくらしつ

加藤ひな子

よそよりは高かられどもわが山の春のひがりはかはらざりけり

關屋愛子

四十

人の世の塵にまみれすうめが香のにほひにこもる山の上のいは

淺井てつ子

七とせをみやこにありて打むかふやまめづらしきふるさこの家

坪野柳子

さこしへにかけず崩れぬ山のごと高きをおのがこゝるさばせむ

中村文子

たききおひて下る山路の夕けぶり老いませる母のわれをまつ覽

久保花子

立どまりこえ來し方をみかへればいつしか山のながばなりけり

有賀晴子

五百重山そなたにいそぐ順れいの旅路のほてよいつこなるらむ

市田豊子

けぶりたつ淺間の山のふもさばらしもさおしわけ一人ゆくな

片山柳子

ふきおるす山風さむみさをさせば名もしらぬ鳥のなく聲のする

花岡眞子

ふとのれの高嶺の雪をくもりなくきよくもてらす初日かげかな

設樂御幸子

解けさにわが聲さへもものすこしみ山はかみのすまひなるらむ

清水錦子

白妙のゆきのたまぎぬかされつゝくもぬにえめるふとのひめ神

鈴木やす子

あけわたる空ほのくゞみ打かすみやまのみざりも春めきにけり